発掘された庄内の遺跡　「中世・近世編」

期日：2010年11月2日（火）～18日（木）　　主催：（財）山形県埋蔵文化財センター
会場：庄内空港ビル３階多目的ルーム　　共催：庄内空港ビル株式会社

亀ヶ崎城跡（酒田市）茶道具

はじめに

平成１９年に始まった企画展「発掘された庄内の遺跡」も４回目となりました。今回は、中世と近世の遺跡を紹介します。中世とは鎌倉時代から安土桃山時代まで、近世は江戸時代のことを指しています。昨年、話題になった直江兼続や戦国時代に村山地区を中心に活躍した最上義光（よしあき）と関連のある遺跡を紹介します。この時期は、戦（いくさ）が多く、城も多数作られているため、紹介する遺物のほとんどが城跡の出土品となります。

梵天塚遺跡（酒田市）銅製品・錫杖（しゃくじょう）

山城と平城

中世の城は土塁や空堀などによる「土作りの城」です。それに対し、天守閣や石垣をもつ勇壮な城は、安土桃山時代の武将・織田信長が最初に建ててから、それ以降全国各地に広まりました。城には兵士が立て籠もったり、泊まったりする建物や敵の侵入を防ぐ堀や土塁、柵や櫓（やぐら）などもつくられるようになってきます。室町時代にはふもとの平城で生活して、戦がはじまると山中に作った山城に立て籠もって戦っていたようです。戦国時代になると戦も増え兵士は山城にいることが多くなるので、曲輪など城自体も複雑な構造になっていきます。庄内地方では、山間部から平野部に出る所に山城が集中していること、海からの攻撃に備えた城館が作られていることなどが特徴となっています。

藤島城跡（鶴岡市）陶器・梅瓶（めいびん）

梵天塚遺跡（酒田市）

「梵天」は魂成仏の意味があり、遺跡の付近は昔から村の墓地があったとの伝承が残っています。発掘調査の結果からも土坑や墓が多く見つかり、遺跡は墓地跡であったと考えられます。出土品の中で目を引くのは、古銭がまとまって見つかったことです。非常時に備えて埋められた古銭（埋納銭）と考えられていますが、約６０種類、1776枚もありました。古銭の種類は「洪武通宝」と「永楽通宝」が最も多く、時期的には 16 世紀頃のものであると考えられています。

埋納銭

藤島城跡（鶴岡市）

県立庄内農業高等学校校舎敷地内にある藤島城跡は、建久４年（１１９３）に土佐林右京守次正が城主として記録されています。南北朝内乱の頃は南朝方の拠点となりました。また、天正１８年（１５９０）には強引な太閤検地への反対一揆の拠点となり、元和元年（１６１５）の一国一城令により廃城になるまで戦国期の厳しい荒波を乗り越え存続しました。発掘調査の結果、本丸の規模は東西約９５m、南北約９０m、内郭が二重の土塁で囲まれていたことなどが分かりました。

陶器・壺

大楯遺跡（遊佐町）

大楯遺跡は、東西８５０m、南北７００mの広域にわたり、堂田地区・大楯地区・館の内地区・道の上地区の４地区から成りたっています。中世鎌倉時代（１２～１４世紀）に地方豪族がかまえた館跡と、それをとりまく集落跡で、遊佐町を含む周辺地域の中心的な位置を占めていた場所であったと考えられます。

銅製品・かんざし

鶴ヶ岡城跡（鶴岡市）

鶴ヶ岡城は、中世には武藤氏の居城で「大宝寺城」と呼ばれていました。天正 19 年 (1591) 庄内が上杉氏の領地となり、直江兼続により修繕されました。慶長６年 (1601) 最上義光が庄内を加増され「大宝寺城」を隠居城として整備し、２年後鶴亀にちなんで鶴ヶ岡城と命名しました。発掘調査の結果、二の丸堀跡・百間堀跡からは江戸時代の漆器が多数出土しました。また、二の丸土塁の基礎部分では土留めの石積みと杭列が見つかり、その構造も明らかになりました。

木製品・くし

亀ヶ崎城跡（酒田市）

亀ヶ崎城は、１５世紀後半には「東禅寺城」と呼ばれていましたが、慶長8年（１６０３）最上義光が鶴亀にちなんで、亀ヶ崎城と命名しました。戦国時代には堀と土塁で囲む総曲輪として整備され、軍事的拠点として存在していました。慶長５年（１６００）の関ヶ原の合戦に伴う最上氏との戦に備え、直江兼続から当時の城主・志駄修理亮に宛てて送られたと思われる「なまり玉（鉄砲玉）二千」の荷札木簡が発見されています。

「慶五　七月三日
志駄修理亮殿」

裏（右）

表（左）

「なまり玉弐（二）千入百分」

荷札木簡